

「のさ」の一形式「んさ」に関する考察

長崎靖子*

A Study of *nsa* Meaning *nosa* in the End of a Sentence

Yasuko NAGASAKI

要 旨

本稿では明治期の小説に見られる「んさ」という文末表現形式に注目した。「んさ」は、「のさ」の音転した表現と考えられる。本稿では、「のさ」と「んさ」とともに、「の」から「ん」へ音転した「のだ」「んだ」、また「もの」「もん」の用例を調査し、その変遷を辿った。

調査した江戸時代の資料では「の」から「ん」への音転としてまず、「もの」から「もん」の用例が見られ、続いて「のだ」から「んだ」への音転の増加が確認される。「もん」「んだ」は、言文一致以降も話し言葉専用として使用され、書き言葉中心に使用される「もの」、「のだ」との明確な役割分担を果たす。

一方「のさ」の音転した「んさ」は明治の小説に見られるが、用例は少なく一般化されることはなかった。これは、「のさ」「んさ」が、いずれも会話文にしか用いられなかったため、「のだ」「んだ」のように役割分担をする場がなかったからと考えられる。

キーワード：「のさ」、 「んさ」、 音転、 言文一致

1. 文末表現「ツサ」

筆者は拙稿（2001）で、江戸語の文末形式の一つである「ツサ」の意味に関して考察した。湯澤（1954）では、文末形式「ツサ」に関し、

「とさ」の音転と思われるが、しかし例によっては、「さ」の上をただ促音にただけと解

*教授 日本語学

されるものもあるようである。(P.647)

とし、「ツサ」が、単に「とさ」の音転と解釈できない用例もあると述べている。そこで拙稿(2001)では『浮世風呂』に見る「ツサ」の用例を観察し、『浮世風呂』の「ツサ」は、「伝聞」の意味の他に「説明」の意味も見られることを明らかにした。

「ツサ」の用例は、明治期の小説にも見られる表現である。坪内逍遙の『当世書生気質』(明治18～19年)や二葉亭四迷の『浮雲』(明治20年)には、次のような用例が確認される。

01 継原 それからが大變だツたツサ。(継原→須河)

02 須河 我輩ハ牛屋へ手拭を忘れてきたツさ。(須河→山村)

『当世書生気質』

03 お政 内の文さんはグッと氣位が立上ってお出でだから、其様な卑劣な事ア出来ないツサ。(お政→本田)

04 お政 今貴君の噂をしていた所さ。え？ 勿論さ、義理にも善くは云えないツさ……はははは。(お政→本田)

『浮雲』

01の用例は継原が芸者の田の次をめぐる吉住と小町田の悶着を須河に語っている場面である。他の書生から聞いた話であるので、「ツサ」の意味は伝聞と考えられる。また、03の用例は、文三の就職の話をもってきた本田に対し、お政が述べた言葉である。就職話を断る文三への皮肉をこめて、「文三は氣位が高いから卑劣な真似はできない」と述べている場面で、文三の考えをそのまま伝えている「伝聞」とも、お政の意見として述べている「説明」ともとらえられる用例である。02は須河が山村に牛屋に戻った言い訳をしている場面、04はお政が本田の噂をしていたと述べている場面である。両者の用例は、内容や状況を相手に説明する意味として使用されており、伝聞の意味とは異なるといえよう。「ツサ」は明治以降は衰退し、現代語⁽¹⁾の中には見られなくなる。

2. 本稿のねらい

『当世書生気質』、『浮雲』には、この「ツサ」の他、現代語に見られない文末表現として「んさ」という表現がある。『当世書生気質』では、「んさ」は書生を中心に使用されている。

05 小町田 ^{たんけつしん}一旦決心した上は。^{うへ}そんな未練^{みれん}があつちやア到底^{たうてい}だめだ。^{おも}思ひきりやアまるで
^{おも}思ひきるんさ (小町田→守山)

05は、書生の小町田と守山の会話である。守山が小町谷、芸者の「田の次」を嫁に貰ってはどうかと言ったのに対し、一旦決心したからには、完全に思い切るのだと決心を述べている場面である。『当世書生気質』では、地方出身の書生も多く登場し、その言葉遣いには東京出身者との違いが見られるが⁽²⁾、「んさ」は東京出身、地方出身の両者に見られる表現である。また「んさ」形式は、書生の言葉遣いの他、遊郭で働く女性にも見られる。

06 秀 ダヨ……イ、エネ。中々承知しないんさ。(秀→源)

06は、おいらん兒鳥の梳籠お秀と遊郭の中どん源作との会話で、お秀が源作に、企みがなかなか進まない事情を説明している場面である。

明治20年の二葉亭四迷著『浮雲』にも、次のような用例が見られる。

07 政 それ／＼その親睦會が有るから一所に往かうツてネお濱さんが勸めきるんサ
(政→文)

07は叔母のお政が文三に、帰りが遅くなった理由を述べている場面である。

「んさ」の用例は、いずれも自分の気持ちや状況を相手に説明する場面で使用されているもので、「のさ」の俗語的表現と考えられる。この「んさ」に関しては、小松(1973)で、「「んさ」などは、あるいは江戸語、少なくとも化政・天保期には少なかったかもしれない。」という指摘が見られるが、他に「んさ」に関し、特に述べられたものはないようである。

先に述べたように、「んさ」は明治期の小説の中には見られるものの、現代語の中では使用されることはない。「のだ」の俗語である「んだ」が現代語の中で一般に使用される一方で、なぜ「んさ」は使用されないのであろうか。「んだ」のように残されていくものと「ツサ」や

「んさ」のように消えてしまう言葉には、いかなる相違があるのか。本稿ではこの点に着目し、「んさ」の調査を進めることにする。今回は「んさ」との比較のため、「のさ」「のだ」「んだ」に関しても用例を採取し、「んさ」と比較する。なお「んさ」との比較のため、「んだ」「のだ」の用例は言い切り形のみを対象とした（終助詞が続く形は含めたが、接続助詞、形式名詞に続く用例は数値から除いた）。調査資料に関しては注3を参照されたい⁽³⁾。

3. 「んだ」の発生

3-1 明和から寛政年間の調査

まず、江戸時代後期の調査として、明和から寛政年間までの黄表紙、洒落本の調査を行う。「のだ」から「んだ」への変化のように「の」が「ん」に音転する語としては、形式名詞の「もの」から「もん」への形も見られる。「もん」はすでに東国語の資料である『雑兵物語』の中で多用されており⁽⁴⁾「もの」よりくだけた表現として東国で一般的に使用されていたものと考えられる。そこで、参考として助動詞「だ」、終助詞「さ」を下接する「もの」「もん」に関しても採取し、表1に示した（形式名詞としての「もの」「もん」に限る。また終助詞が続く形は含めたが、接続助詞、形式名詞に続く用例は数値から除いた）。

結果は表1に示す通りである。「のだ」「のさ」の用例は見られるが、「んだ」「んさ」は調査資料では見られず、また、「でござり（い）ます」等、他の断定表現に続く形でも「ん」に変化したものは見られなかった。「もんだ」は黄表紙、洒落本共に見られる。最も用例が多かったのが『辰巳之園』である。以下に『辰巳之園』の「ものだ」「もんだ」の用例を示す。

如雷 新ぼう、^{お(も)しろ}面白イか。

08 新五 ^{いなか}田舎とはちがつたものだ。(新五→如雷)

如雷 さ新さん、あがんねエ。

09 新五 早いもんだ。^{ゆめ}夢のやうにきた。(新五→如雷)

08, 09とも田舎武士の新五左エ門と如雷の会話に見られる用例である。08は、初めて深川の遊郭へ遊びにきた新五左エ門が、その華やかさに驚いている場面、09は、同様に新五左エ門が深川の遊郭に着いたことに感嘆している場面であり、如雷に話しかけているというより独白している言葉と考えられる。新五が「もんだ」を使う場面は他に一例見られる。猪牙船に初

「のさ」の一形式「んさ」に関する考察

めて乗った新五が「ア、こりやアお細工なもんだ」と驚いている場面である。「もんだ」は、「すとんだもんだ」「ごうせいなもんだ」「凄ひもんだ」など、「ものだ」に比べ、ぞんざいで話者の心情を吐露する場面に使用されているようである。性差に関しては「ものだ」と「もんだ」とも、客の男性も遊郭で働く女性も使用しており、特に差は見られない⁽⁵⁾。また『辰巳之園』には、同年の『遊子方言』に比べ、「もんだ」の用例が多く使用されているが、これは『遊子方言』が吉原を題材にしているのに対し、『辰巳之園』は深川の遊郭が題材であり、登場人物がより砕けた物言いをしているためと考えられる⁽⁶⁾。

表 1

資料名	ンダ	ナダ	ンサ	ノサ	モンダ	モノダ	モンサ	モノサ
金々先生栄華夢（安永 4 年 1775）	0	0	0	0	0	0	0	0
高慢斉行脚日記（安永 5 年 1776）	0	0	0	0	0	2	0	0
見徳一炊夢（天明元年 1781）	0	0	0	1	0	1	0	0
御存商売物（天明 2 年 1782）	0	0	0	1	0	0	0	0
大悲千祿本（天明 5 年 1785）	0	0	0	0	1	0	0	0
莫切自根金生木（天明 5 年 1785）	0	0	0	0	0	2	0	0
江戸生艶気樺焼（天明 5 年 1785）	0	0	0	7	1	5	0	1
文武二道万石通（天明 8 年 1788）	0	1	0	0	1	3	0	0
孔子縞于時藍染（寛政元年 1789）	0	0	0	0	2	6	0	0
心学早染艸（寛政 2 年 1790）	0	0	0	0	2	1	0	0
敵討義女英（寛政 7 年 1795）	0	0	0	0	0	0	0	0
遊子方言（明和 7 年 1770）	0	0	0	0	0	1	0	0
辰巳之園（明和 7 年 1770）	0	1	0	3	10	7	0	0
道中粹語録（安永 8 年 1779 頃）	0	0	0	1	2	0	0	2
卯地臭意（天明 3 年 1783）	0	7	0	4	4	2	0	0
総籬（天明 7 年 1789）	0	4	0	5	8	3	0	2
傾城買四十八手（寛政 2 年 1790）	0	0	0	6	4	6	0	0
錦之裏（寛政 3 年 1791）	0	1	0	1	3	1	0	0
傾城買二筋道（寛政 10 年 1798）	0	0	0	4	3	7	0	0

3-2 文化文政から幕末までの調査

文化文政期から幕末までの調査は滑稽本、人情本から行なった。結果は表 2 のとおりである。

表2

資料名	ンダ	ダ	ンサ	ノサ	モンダ	モノダ	モンサ	モノサ
浮世風呂（文化6～10 1809～13）	1	46	0	69	54	29	1	22
浮世床（文化10～文政6 1813～23）	0	55	0	35	40	34	0	18
春色梅児誉美（天保3～4 1832～33）	2	46	0	8	8	16	0	0
春色辰巳園（天保4～6 1833～35）	20	61	0	16	25	12	0	0
仮名文章娘節用（天保2～5 1831～34）	1	27	0	19	3	19	0	2
春色恋廻染分解（万延元年 1860）	12	67	0	40	12	16	0	0
春色江戸紫（元治元年 1864）	5	30	0	20	15	3	0	1
花暦封じ文（慶応元年 1865）	6	70	0	18	16	14	0	2

この時期の資料では、「もんだ」の用例が多数見られ、江戸語の中でも一般化していることが窺われる。「んだ」は、『浮世風呂』2例、『浮世床』1例、天保以降の人情本では『春色梅児誉美』に2例、『春色辰巳園』に20例の用例が見られる。両書の「んだ」の使用者は、芸者の米八、仇吉、増吉、そして仇吉の母親とすべて女性である。『浮世風呂』『春色梅児誉美』『春色辰巳園』『春色恋廻染分解』から「んだ」の用例をあげる。

10 いさみ コレエ、^{なまゑへ}生酔だからふせうすらアエ。さもなけりやア、とつくに^{はり}張くぢくんだ
ア（いさみ→風呂場の人） 『浮世風呂』

11 よね ナニサどうもしねへが全体このごらアさはりよふじで^あたん^だは^ね（米八→船宿
の女） 『春色梅児誉美』

12 仇 ^{ほか}外じやアないがネ、おまへにそう^{いつ}言て^{おか}置なくちやアならねへことが^{ある}有から、^{わるどめ}悪止を
したんだアネ。（仇吉→丹次郎） 『春色辰巳園』

13 小萬 ^{わたしひとり}私一人で^{かんが}考へ^{こと}事をしてゐると^{くわせつ}花雪さんが^{ちつ}些と^{さけ}お酒に^{すい}酔つて、^{こふくや}呉服屋を^つ連れて^き来た
んだよ。（小萬→お夏） 『春色恋廻染分解』

10 は、勇み肌の男が生酔と喧嘩をしたあと、周りの人と話している場面である。人情本の用例では11が芸者の米八が船宿の女性に話しかける場面、12が仇吉が恋い慕う丹次郎と話を

「のさ」の一形式「んさ」に関する考察

している場面、13は芸者の小萬とお夏との会話である。「張りくぢくんだア」「さはりよふじでゐたんだはネ」「悪止をしたんだアネ」「呉服屋を連れて来たんだよ」と、心情を述べる場面で使用されており、「のだ」より主観性の強い表現と考えられる。比較として、『春色梅児誉美』『春色辰巳園』より「のだ」の用例を示しておく。

14 米 ^{まこと}寔にやせたねへ。マア色^{いろ}のわりいことは。眞^{まつきを}青^{いつしぶん}だヨ。何時分^{いつしぶん}からわるいのだへ（米八→丹次郎） 『春色梅児誉美』

15 仇 ナゼマアそんなにふさいであるのだへ（仇吉→丹次郎） 『春色辰巳園』

14の米八、15の仇吉の用例とも、丹次郎の様子を気遣う場面で使用されている。女性の用例を見ると、「のだ」を使用する場合、疑問詞とともに用いられている場合が多い。

表の数値には入っていないが、形式名詞、接続詞に続く形、否定に下接する形、反対に否定が下接する形も見られる。

16 とび おいらアかたつきし^し知らなんだ。しつたらとりせへに行^{いくん}だものを 『浮世風呂』

17 いさ ^{ふだん}不断ならはりくぢいてギウの音^ねも出^ださせねへんだが、此方^{こつち}が不始末^{ふしまつ}といふもんだから、（いさ→びん） 『浮世床』

18 金 ヘン、そんな安^{やす}いんじやアねへ。是^{これ}でも大体^{てへ}銭^{ぜね}をかけて習^{なら}ツたのだア。（金→富） 『浮世風呂』

19 いさ そりやあ二文^{にもん}も承知^{しやうち}だがの。一体酒^かが悪い^{かはい}はな。斯^{かうい}云^かて可愛^さうに酒^{さけ}に咎^{とが}をなするんぢやアねへが、（いさ→びん） 『浮世床』

16は長屋の住人の「とび」という女性と同じ長屋の「した」という女性の会話、17と19は勇み肌の男が床屋の主人びんに話しかけている場面、18は金と富（両者の名前ははっきりしない）の会話に見られるものである。これらの用例も語気が荒く、心情を述べ立てる場面での使用である。

「もんさ」は『浮世風呂』の中の下女同士の会話で1例見られる。「ものさ」の用例とともに次に示す。

20 徳 ^{こども}子供といふ^{もの}者は^{あつ}熱い^ゆ湯で^{こり}懲させると^{ゆぎら}湯嫌ひになるものさ (徳→金)

21 ● なアんのかのと、ヘン、よくいふもんさ (●→■)

20は、上層の町人同士の会話で、「子供というものは」と一般的な子供の性質を説明している場面である。21下女の■が●の髪型をほめたのに対し応えたものである。20の「ものさ」に比べ、主観性の強い表現と捉えられる。

以上、文化文政以降幕末までの用例をみると、「んだ」の用例が、時代と共に増加傾向にあることがわかる。人情本の資料では、「んだ」の使用者に女性が多いことが特徴的である。筆者は拙稿(2006)で、江戸語における「でござります」と「でございます」の使用者について調査し、『浮世風呂』での「でございます」の使用は、圧倒的に女性に多いことを述べた。人情本の「んだ」の結果にも同様のことがいえるようであり、音転した言葉遣いは、女性の使用から広まっていくことが予想される。

4 「んさ」の発生

次に、明治以降の用例を観察する。資料は『安愚楽鍋』『当世書生気質』『浮雲』『金色夜叉』『道草』を使用した。これ以降「んさ」「のさ」「ものさ」「もんさ」のみを調査する。結果を表3に示す

小松(1973)では、書生の言語に関し、次のように分類している。

本稿では、純東京語グループ(小町田完爾)、東京語化グループ(守山友芳、倉瀬蓮作、宮賀兄弟、継原青造)、非東京語グループ(任那秀一、須河悌三郎、野々口清作、桐山)と分けて、区別しながら検討を進めるつもりである。

『当世書生気質』の中で最も「んさ」形式が見られるのは倉瀬と継原である。両者とも小松(1973)で分類した東京語化グループに入る。また、純東京語化グループの小町田も「んさ」形式の用例が見られるので、「んさ」は東京の知識人の中で使用された言葉と考えてよいであ

「のさ」の一形式「んさ」に関する考察

表 3

資料名	ンサ	ノサ	モンサ	モノサ
安愚楽鍋 (明治 4～5 1871～72)	0	7	0	3
当世書生氣質 (明治 18～19 1885～86)	23	34	2	1
浮雲 (明治 20 年 1887)	1	9	0	5
金色夜叉 (明治 30～36 1897～1903)	5	20	0	0
道草 (大正 4 1915)	0	9	0	2

ろう⁽⁷⁾。

22 継 レツタア〔手紙^{てがみ}〕の中へエムをスリイ、ハアフ〔三圓半^{さんはん}〕だけ包みこんで圖留^{つづる}をきめてしまいやアがつたんさ (継原→倉瀬)

23 倉 イ、ヤさうでないんさ。^{のろけ}情痴に似て^{のろけ}情痴にあらざる^{いっしゆきみょうふ}一種奇妙不可思議^{かしぎ}の話しだ (倉瀬→継原)

22, 23 の用例は倉瀬と継原の会話である。継原の門限に遅れた話から始まり、やがて倉瀬が遊女屋で体験した不可思議な話をする場面である。その他、前掲した 05 の小町田の用例、女性の使用として 06 のお秀の用例があげられる。『浮雲』のお政の用例は 07 にあげた。

次に『金色夜叉』の用例を見ていく。『金色夜叉』の「んさ」形式は 5 例見られ、そのすべては富山唯継が使用している。

24 唯 今度の選挙には実業家として福積が当選したらう。俺も大いに与つて尽力したんさ。
(唯継→宮)

25 唯 俺の社会では富山の細君と来たら評判なもんだ。会つたことの無い奴まで、お前の事は知つてをるんさ。(唯継→宮)

24, 25 の用例は唯継と宮の会話に見られる。家に籠り塞いでいる宮に、外出するように進めている場面である。他の 3 つの用例も同じ場面で用いられており、妻の宮に対する気安い表

現といえよう。同場面では、唯継の宮に対する言葉遣いに「胸でも痛むんか、頭痛でもするんか」がある⁽⁸⁾。富山唯継に関しては「一代分限ながら下谷区に聞ゆる資産家の家督なり」という描写が見られ、東京出身の知識人という設定と考えられる。また、尾崎紅葉は東京芝の生まれである。これらの点から、やはり「んさ」は、東京人の言葉遣いにあったといえよう。「のさ」と「んさ」に関しても、「のだ」と「んだ」の使い分け同様に、語気は「んさ」の方が強いようである。しかし、「さ」という終助詞自体が主観的な表現を示すものであるため、「のだ」「んだ」ほど、両者の相違は表れないようである。

5 「んさ」の消滅理由

明治以降、言文一致が進むとともに、「のだ」「んだ」は、地の文と会話文での使用の役割分担がなされていく。表4は『浮雲』に見る「のだ」「んだ」の使用状況である。この表を見ると、「んだ」は会話文のみの使用、「のだ」は、会話文と地の文に使用されていることがわかる。

表4

		会話文	地の文
ノダ	男性	9	10 (純粋な地の文5, 引用文2, 独白3)
	女性	5	
ンダ	男性	15	0
	女性	41	

明治以降、言文一致により書き言葉は話し言葉に近づくが、完全に一致したわけではない。書き言葉と話し言葉との間には、依然として表現の差異が見られる。「のだ」と「んだ」は、その差異の一つといえよう。「のだ」は主に文章的な表現、「んだ」は会話表現専用という住み分けがなされることにより、両表現とも現代語の中に残ってきたと考えられる。同様に「もの」「もん」に関しても、書き言葉、話し言葉という役割分担がなされることにより、現代でも両形が残ったわけである。

一方、終助詞的な機能を持つ「さ」を含んだ「のさ」「んさ」は、いずれも会話文にしか用いられない表現である。このため、「のだ」「んだ」のように役割分担をすることができず、「のさ」に統一されていったものと考えられる。「んさ」の他、『当世書生氣質』や『金色夜叉』には、「のか」に対する「んか」の形も見られるが、これも現代語の中では「のか」の形しか残されていない。意味上の相違、あるいは明確な役割分担がなければ、どちらかの言葉が消滅し

「のさ」の一形式「んさ」に関する考察

ていくのは必然的なことであろう。

おわりに

今回は、明治期の小説に見る文末表現「んさ」を中心に、「の」から「ん」へ音転する語について考察した。「もの」「もん」、「のだ」「んだ」のように、両形とも残っているものは、書き言葉と話し言葉あるいは何らかの役割分担があり、明確な使い分けがなされるからであろう。一方「のさ」「んさ」、「のか」「んか」のように、使い分けが明確ではないものは、どちらかが消滅する運命を辿るようである。この取捨選択においては、「のさ」「んさ」、「のか」「んか」のように、音転しても、元の形に落ち着くものと、「でござります」「でございます」、「くださります」「くださいます」のように、音転した語の方が一般化するものがある。個々の変化の要因に関しては、さらに具体的に考察していく必要があるだろう。今後の課題としたい。

注

- (1) 本稿では「現代語」を現代の共通語という意味で使用している。
- (2) 小松(1973)では、p.252に示すように、書生を純東京語グループ、東京語グループ、非東京語化グループに分け、その言葉遣いの相違を述べている。
- (3) 調査資料は次の通りである。
『金々先生栄華夢』(安永4年 1775) 『高慢齊行脚日記』(安永5年 1776) 『見徳一炊夢』(天明元年 1781) 『御存商売物』(天明2年 1782) 『大悲千祿本』(天明5年 1785) 『莫切自根金生木』(天明5年 1785) 『江戸生艶気樺焼』(天明5年 1785) 『文武二道万石通』(天明8年 1788) 『孔子縞于時藍染』(寛政元年 1789) 『心学早染艸』(寛政2年 1790) 『敵討義女英』(寛政7年 1795) 『遊子方言』(明和7年 1770) 『辰巳之園』(明和7年 1770) 『道中粹語録』(安永8年 1779頃) 『卯地臭意』(天明3年 1783) 『総籬』(天明7年 1789) 『傾城買四十八手』(寛政2年 1790) 『錦之裏』(寛政3年 1791) 『傾城買二筋道』(寛政10年 1798) 以上は『日本古典文学大系 47』(1971)
『浮世風呂』(文化6～10 1809～13) 『日本古典文学大系 63』(1959) (但し「浮世風呂」の前編は『新日本古典文学大系 86』(1989)を使用。)
『浮世床』(文化10～文政6 1813～23) 『新潮日本古典集成』(1982)
『春色梅児誉美』(天保3～4 1832～33) 『春色辰巳園』(天保4～6 1833～35) 『日本古典文学大系 64』(1962)
『仮名文章娘節用』(天保2～5 1831～34) 『春色恋廻染分解』(万延元年 1860) 『春色江戸紫』(元治元年 1864) 『花暦封じ文』(慶応元年 1865) 人情本刊行会(1916)
『生慮 安愚楽鍋』『日本近代文学大系 1巻』(1970)

「当世書生氣質」『明治文學全集 16』(1969)

「浮雲」『日本近代文学大系 4 卷』(1971)

「金色夜叉」『明治文學全集 18』(1965)

「道草」『日本近代文学大系 27 卷』(1974)

- (4) 『雑兵物語』の「もの」、「もん」の使用例は次のようである。
- ・早速其つかれた所へ胴薬壹匁斗のせて、火をつければ、毒気はやくつんのく物だ。
 - ・胸の通りに玉かあれは、鉄砲かためられないもんだ。
- (5) 『辰巳之園』にある「やだちゆう節」(頭注では「明和ころから流行し、幕末頃には「やだちゆう節」とよばれ、拳歌になった俗謡」とある)では「もんです」の形が見られる。
- おいらを狐が、はらませて、御亭になろとは、わしや、やです。やです／＼、やでもです。しんぢつやあでは、なけれども、人目はづかしけりや、わしややです。やですと云事はいわねエもんです。
- (6) 『遊子方言』では接続助詞「から」に続く「もんだ」が見られる。また、『叩地臭意』には「ものでござへす」「もんでござへす」の用例も見られるが、数値には入れていない。
- (7) 著者の逍遥は地方出身者で、18歳の時に東京に上京した。『当世書生氣質』の稿を起こしたのは、27歳のときとされている。小松(1973)では「流入者逍遥は、この9年間に東京語を習得したという自信を得たにちがいない。」としている。
- (8) 「んか」は、『当世書生氣質』の書生の言葉にも見られる。
- 継原 君もあちらへいくんか。それじやあ一所にゆかう。

参考文献

- 小松 寿雄 (1973) 「『^二当世書生氣質』の江戸語的特色」『埼玉大学紀要』 第9巻
- 湯澤幸吉郎 (1954) 『増訂江戸言葉の研究』 明治書院
- 長崎 靖子 (1998) 「終助詞「さ」の機能に関する一考察」『国語学』(国語学会) 192 集
- 長崎 靖子 (2006) 「江戸語における「でございます」」『会誌』『会誌』 第25号